

2 うたの旅人 ノーサイド
3 やさい流 イカのカルパッチョ
作家の口福 平野啓一郎
私の「肉観」は変わった
赤峰幸生の男の流儀 粋を極める
コートが気になる季節

5 元気のひけつ バランスよく食べてがんを防ぐ
がんは、食生活によってある程度は予防できるといいます。ふだんの食事で気をつけるべき点を専門家に聞きました。
元気のひみつ 立川談笑さん
101歳・私の証 あるがまゝ行く 日野原重明
ぼっかり空いた一日に

6 今さら聞けない+ 国の食生活指針ののちゃんのDO科学
ろうそくは、なぜ燃え続ける？
7 奈良には古き仏たち 東大寺 良弁僧正
高橋睦郎 季をひろう 十二月
パズル 同じもの探し、漢字ナンクロ、数独
ご意見・ご感想はbe@asahi.com



Song



うたの旅人

第92回全国高校ラグビー大会の大阪府予選第3地区の決勝終了後、敗れた同志社香里の選手がひとり残ってたたずんでいた=11月18日、大阪府東大阪市の近鉄花園ラグビー場

奇跡をめがけキックした

松任谷由実「ノーサイド」

そとくさくさ邪念をふるい落とすように小さきみな足踏みをしてから、黒衣の選手はおもむろに走りだした。
グラウンドをおおう枯れ草にすえられた梅田のポールまで約4分の助走には1秒とかならない。その刹那が、近鉄花園ラグビー場(大阪府東大阪市)を締めつけられるような緊迫感で包みこみ、スタンドの観客をことごとく金縛りにしていた。
1984年1月7日、近鉄花園ラグビー場の第1グラウンドは第63回全国高校ラグビー大会決勝戦の舞台となっていた。
地方予選を勝ち抜き、あこがれの「花園」でトーナメントを勝ちあがったのは天理(奈良県天理市)と大分舞鶴(大分市)だった。天理の純白のジャージーと大分舞鶴の黒一色のジャージーが死にも狂いで激突した戦いは、すでに後半のロスタイムに入り、5分余り経過していた。
後半の30分の試合時間が尽きたときのスコアは、18対12で天理が優勢だった。ところが、ロスタイムに入って4分30秒後、大分舞鶴が起死回生のトライを決め、4点(現行ルールでは5点)を加えたのである。
18対16。ゴールキックをはずさなければ2点、上積みして同点になり、その瞬間に「ノーサイド」(試合終了)のホイッスルが鳴りわたる。ルールに延長戦

はなく、引き分けなら両校優勝になる。あきらめかけた栄冠を崖っぷちのひと蹴りでもぎとる劇面さながらの幕切れがあるのか。観客は身を乗り出して見届けようとしていた。

大分舞鶴のキッカーをまかさされた背番号15のフルバック、主将の福浦孝二さん(47)は、天理を応援する観客が「はずせー!」と口々に叫ぶのを心静かに聞き流していた。奇跡が夢想から現実へ変わりかける手ごたえを、そのときほど身にしみて感じたことはなかったからだ。

最後のトライは、天理の選手がボールをタッチラインの外へ出そうとしたキックをしこじつたためにチャンスが転がりこんできた。ミスキックしなれば、そこでノーサイドでした。とつくに負けていたのに俺たちはついで。この流れなら(ゴールキックは)絶対に入る。そんな自信があったんです」

ゴールポストの左55度から約30度のキックだった。ラグビー通が「入れどころ、はずしどころ」という嫌らしい角度だ。大分舞鶴の背番号11、左ウィングの田辺良典さん(46)はこう回想する。「練習なら、ほぼはすさないだろうけど、じつに微妙な角度でした。真正面なら同点優勝を確信したはずですが、あのときはただ、勝敗よりも、このキックで試合が終わるんだと思いつつながら見守るだけでした」

スタンドで戦況に見入っていた天理の監督(当時)の田中克己さん(59)は、引き分けを覚悟していたという。「試合内容では、うちが負けてましたからね。トライ数も少なかった。あのキックを決められても仕方ないなと淡々と眺めてました」

このはりつめた光景を、松任谷由実さんは、なにげなく自宅のテレビで見かけたのだという。ヘッドホンステレオでパラードを聞きながら、音楽と映像が渾然一体となり始めていた。放たれたキックは、低い軌道でゴールの左へそれていった。

文・保科龍朗
写真・筋野健太

2面に続く

大阪府 東大阪市



全国高校ラグビー決勝戦から生まれた「ノーサイド」

主将は花園に舞いもどった

ノーサイドのホイッスルが花園のグラウンドに響きわたると、大分舞鶴の主将、福浦孝二さんは放心したまもなくおれかけ、かろうじて踏みとどまった。すすり泣きをこらえきれず、うつむいたまま、こんな無言の自問自答を繰り返していたのである。「せつかく花園に舞い戻れた自分がなぜ、最後のキックを決められずに負けるんだ……」

瀬戸際の同点ゴールキックには、あつけなく失敗した。だが、なによりも、自分自身がそのとき、花園のグラウンドにたたずんでいること自体が奇跡だった。前日の朝まで、たった一人、決勝戦は欠場する心づもりをしていたのだから。大会が始まる数週間前、福浦さんはラグビー部監督(当時)の三重野建さん(73)に、こんな悩みごとを打ち明けていた。「今度の大会で決勝まで勝ち進んだら、大学入試の試験日と重なってしまうので試合に出られなくなりそうです」

三重野さんはしばし絶句してから、「受験はおまえの人生の一大事なんだから、そのときが来たら試験に行つてこい」と寛大にうなずいた。しかし、内心は、真意をはかりかねていたという。「いざ決勝進出となったら、キャプテンが試合を捨てられるものと、いざかしんたんです。やっぱり試合に出ます」と言いだすだろうと見越していました

「日本古来の武士道精神に通じるスポーツ」として「校技」に定められ、真っ先にラグビー部がつくられた。花園では、三重野さんが監督に就任した74年度の大会で初優勝をなしとげてから80年代半ばまでベスト8の常連になり、「黒衣の軍団」の名をとどろかす黄金時代を築いていたのだ。だが、福浦さんが主将になった83年度

のチームは平均体重が前年度より約10kgも落ちてフォワードの破壊力が弱まり、前評判で早々と見限られていた。決勝進出など思いもよらず、主将の申し出をだれ一人、一大事と受け止めなかった。背番号14、右ウィングの井上博文さん(47)の記憶にあるのは、準々決勝から毎試合の前夜に選手全員が帰りに泣き泣き、涙が頬を伝う姿を見た。代わりには控

「この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

県立高校の大分舞鶴は県内トップクラスの進学校だ。当時のラグビー部員も全員、大学をめざし、福浦さんは新設の国立大学、鹿屋体育大(鹿児島県鹿屋市)の推薦入試に願書を出していた。その2次試験の日が、花園の全国大会決勝戦と重なっていたのである。進学校であるとともに、大分舞鶴は文武両道を校是としている。とくに、ラグビーは、1951年の学校創立のときか



この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

この大会が40回目の出場だった古豪天理の監督(当時の田中克己さんは1日6時間の練習でタフな攻撃力のあるチームに鍛えあげた。大分舞鶴が浮足立っていると見透かす攻勢をかけ、前半17分で12対0とリードし、惨敗の恐怖を相手に植えつけた。大分舞鶴の三重野さんは、天理につけてこまれたのは選手にプレッシャーをかけなかったからだ」と、いまなお悔やむ。「いつも試合前のロッカールームで、感極まって泣き出すほど選手一人ひとりに檄を飛ばして絞めていたのに、あの日に限って魔が差したように気楽にやらせた。それが痛恨のミスでした」

ぶらり

高校ラグビーの聖地「花園」とは、大阪府東大阪市にある近鉄花園ラグビー場(☎072・961・3668)のことだ。

1929年に英国のトゥイッケナム競技場をモデルに日本最初のラグビー専用競技場として開場した。全国高校ラグビー大会の会場になったのは63年から。91年に改装されたメインスタジアムの第1グラウンドは3万人を収容する。ラグビー資料室もある。近鉄奈良線東花園駅から「スクラムロード花園」と名づけられた道づたいに徒歩約10分。



第92回全国高校ラグビー大会は12月27日から始まる。決勝戦は来年1月7日。大分舞鶴

(写真は11月4日の大分県予選=同県由布市)も県代表で出場する。27年連続で51回目。大会日程など詳しくは全国高体連ラグビー専門部の公式サイト(<http://www.rugby-try.jp/index.html>)へ。

味わう

近鉄花園ラグビー場では場内限定のB級グルメも要チェックだ。レストランでは「オールブラックラーメン(800円)」=写真=が気になる。ニュージーランド代表「オールブラック」にあやかっただけの新メニュー。

麺に竹炭を練りこみ、スープは黒しょうゆベース。具もムール貝や黒なるとなどが載った、まさにラーメン界のオールブラックだ。売店ではラグビーボール型肉まん「ラグビーまん(300円)」が人気だ。



聴く

「ノーサイド」は松任谷由実さんの最新アルバム「日本の恋と、ユーミンと。」(EMIミュージック・ジャパン) =写真=で聴ける。デビュー40周年記念のベストアルバムで3枚組み46曲収録、3600円。

松任谷さんはいま、イギリスのロックバンド「プロコル・ハルム」と共演するライブツアー中だ。1967年に大ヒットした彼らのデビュー曲「青い影」は、松任谷さんが13歳のときにラジオで聞き、シンガー・ソングライターになる未来を思い描かせた「運命の曲」だという。公演予定は3、6日=大阪国際会議場メインホール(大阪市) / 10、11日=昭和女子大人見記念講堂(東京都世田谷区) / 12日=名古屋国際会議場センチュリーホール(名古屋)。詳しくは公式ホームページ(<http://yuming.co.jp>)へ。



読者へのおみやげ

松任谷由実さんのデビュー40周年記念ベストアルバム「日本の恋と、ユーミンと。」の初回限定版(秘蔵ライブ映像を収録した特典DVD付き)を3人に差し上げます。はがきに住所・氏名・年齢・「1日」を明記し、〒119-0378 晴海郵便局留め、朝日新聞be「うたの旅人」係へ。6日の消印まで有効です。

今週紹介したCDは朝日新聞デジタルから購入できます。

<http://www.asahi.com/shopping/tabibito/>

◆次回は、1991年にリリースされたT-BOLANのセカンドシングル「離したくはない」(山梨県富士河口湖町)の予定です。